

デューイ教育哲学の形成と原理 (5)

—— キリスト教と倫理学 ——

小 柳 正 司

(1992年10月15日 受理)

The Early Developments of John Dewey's Philosophy of Education and Its Underlying Principles (5)

—— Dewey's Interpretations about Christian Ideas During His Michigan Years ——

Masashi KOYANAGI

はじめに

デューイは、1887年の「倫理学と自然科学」をかわきりに、倫理学の研究に取り組むことになった。そこでの彼の基本的な問題意識は、科学と道德、あるいは科学と宗教を統一する新しい哲学的立場を確定するということであった。それは、いわば初期デューイの思想形成そのものを導いてきた根本的な問題意識であったと言ってよい。

そもそもデューイの哲学への関心は、彼自身の晩年の回想によれば、大学3年生のときトマス・ハクスレーの『生理学初歩』を通じて「相互依存と相互連関的統一の意識」というものに目覚めたときに始まった。言い換えれば、それは一種の有機的世界観に基づいた「統合への欲求」というものであった。当時彼は、ニューイングランドのピューリタニズムがもたらす「分かち切り離す意識」によって「内面の裂傷」を負っていた。それは「重苦しい個人的危機の源泉」であったと彼は述べている。¹⁾ デューイにとってピューリタニズムは、もはや自己の生活に知的確信と展望を与えてくれる教義の体系ではありえなかった。産業化と都市化の波が押し寄せ、古い共同体的秩序と伝統的価値観が解体していく時代状況の中で、デューイは正統信仰の枠の外に広がる新時代の諸思想に次々と知的興味を示していった。²⁾ だが、因襲的な宗教的信念の拘束からはみ出そうとする彼の本能的な知的欲求は、それを「罪」として意識させ押しとどめる宗教的信念との間に「内面の葛藤」、内なる闘いを生じさせる。なぜなら、ピューリタニズムは、自然・欲求を神・理性から截然と区別し、後者をもって前者を裁き抑圧する意識の機制そのものであったからである。ピューリタニズムの伝統的教義がもはやデューイにとって自我を抑圧する精神的桎梏でしかないとなれば、そ

こからの自我の解放という彼の一身上の課題は、分裂した自我を再び全体として統合せしめるほどに包括的な価値の体系を探究するという知的課題と、常に二重写しの形で展開されていかざるをえなかった。それは同質的な地域的共同体 (local community) の解体と巨大な産業社会の出現という歴史の一大転換点において、かつての地域的共同体に代わるべき新たな社会秩序と、それを支える新たな精神統合の原理を求めていくということであった。³⁾

デューイは、大学を卒業した後、一時ハイスクールの教師をしていたことがある。そのおり彼は、ひとつの「神秘的体験」をしている。それは、「宇宙との一体感」の中で、それまで彼の内面に重くのしかかっていた「罪の意識」が「至高の喜びみに満ちた感情」によって一挙に解消されたという体験である。これによって彼は、超越的な絶体者だとか既成の道德律だとかいった外的規準によって自己の行動をいちいちチェックする必要はなくなり、自己の内なる神＝理性の働きに従って、心の赴くままに真理の探究を行えば、それでよいと納得することができた。⁴⁾ もちろん、このような「神秘的体験」あるいは「宇宙との一体感」が、その後のデューイの哲学研究の中身を直接決定づけたと見ることはできない。しかし、少なくともこの時点で、つまり本格的な哲学研究に取り組むことになる以前に、デューイは確かに、信仰と学問、宗教と科学の対立を自己の「内面の葛藤」の問題として引き受け、その解決を人間と神との一体性という方向に求めていたのである。それは、自然的世界と超自然的世界、物質と精神、人間と神とを画然と区別するニューイングランド・ピューリタニズムの二元論からの決別を意味するとともに、地上世界における人間理性の働き (科学) が、たとえ既成の宗教教義の枠をはみ出すことがあったとしても、それ自体は「神の意図」に反することではなく、むしろその有効な実現に向けた運動に他ならないことを確信するものであった。⁵⁾

以下では、ミシガン時代 (1884～1894年) のデューイにおける宗教論関係の諸論文によりながら、彼の倫理学研究の前提となっているキリスト教解釈の文脈をたどってみることにする。

デューイのミシガン時代は、一般に前期と後期にわけられる。前期は彼がミシガン大学に着任した1884年からミネソタ大学に転任する1888年まで、後期は翌年に彼が再びミシガン大学に戻った1889年からシカゴ大学に転任する1894年までである。そして、前後10年間にわたるミシガン時代は、デューイのいわゆる実験主義 (experimentalism) あるいは道具主義 (instrumentalism) の哲学が形成される時期にあたり、彼の思想形成にとってきわめて重要な意味をもつ時期である。特に、彼がミネソタから戻った直後の1890年は彼の思想形成上の「臨界年」 (a critical year) とされており、⁶⁾ この年を境に、デューイはそれまでのヘーゲル主義の「絶対的自己意識」の概念に依拠していた立場を放棄して、徐々にその概念を人間の具体的な「行為」 (conduct) の機能主義的な分析の中に解消していくのである。

ところで、このミシガン大学時代のデューイは、倫理学研究を中心とする哲学理論の展開のかたわら、大学内の学生キリスト者協会 (Student Christian Society) の活動に積極的に関与し、その聖書クラスの講師を引き受けたり、日曜集会で講義をする中で、若い学生たちに向けて自分のキ

リスト教解釈を積極的に提示している。後にも先にも、デューイが自分のキリスト教解釈を公に論じているのはこのミシガン大学時代において他にない。残念ながら、そこで彼がどのようなキリスト教解釈を展開していたのか、その具体的な内容を知る文献はあまり多く残されていない。⁷⁾ だが、そこに示された彼のキリスト教解釈の内容をこの時期の彼の哲学理論（とりわけ倫理学理論）の展開と関連づけてみると、彼のヘーゲル主義の受容と離脱がどのような思想的文脈の中で行われていたのかがある程度理解される。そして、ヘーゲル主義の受容から離脱に至る彼の思想形成の過程が単なる理論上の脱皮として行われたのではなく、初期から彼が一貫して追究していた一つの理念の自己発展の過程として行われたものであることが理解されるのである。

1. 神の認識

デューイは、ミシガン大学に赴任して早々の1884年11月に学生キリスト者協会で「神を知ることの義務」と題する講義を行っている。ここで彼は、神を認識することは人間にとって最高の道徳的義務であり、神を認識できないのは知的欠陥ではなくて、神を認識しようとする「意志」の欠如によるものであり、従ってそれは道徳的欠陥であるという主張を展開している。だが、デューイによるこの主張は、単純な「神を信じなさい」式の説教でもなければ、超越的な人格神の支配を認める弁神論でもなかった。何よりもそれは、近代科学の発展がもたらした信仰上の懐疑論を克服する精神的拠り所を示そうとするものであった。

「多くの懐疑論者が言明するところによれば、彼らの最大の悲しみは、彼らが父なる神のいない孤独な世界に孤児として生きているということであり、父なる神を知ることができれば、彼らの最大の喜びとなるだろうということである。しかし、キリストと彼の真弟子たちは、はっきりとこう述べている。神を知ることができないというのは、知的欠陥ではなくて、道徳的欠陥である。」⁸⁾

こうした信仰上の懐疑論と孤独感は、何よりもデューイ自身が「内面の葛藤」という形で若いころに体験していたものに他ならない。それは「伝統的な宗教的信念と私 [デューイ] 自身がすなおに抱くことができる考え方との間の葛藤」として「重苦しい個人的危機の源泉」をなしていたものである。⁹⁾

実際、南北戦争後のこの時代は、それまで道徳的真理の偉大な源泉であったキリスト教信仰が根底から崩壊していった時代であった。特に、種の変異を純然たる自然史の過程として説明したダーウィンの進化学説は、神の創造説を否定し、森羅万象に対する神の意志の干渉という観念を根本から排除することによって、啓示宗教の信仰原理に決定的な打撃を加えたのであった。さらに、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) の社会進化論は、人間の行為に対して道徳的な善悪の判断を下すものは、もはや神による人間魂の救済計画などではなくて、適者生存という冷厳な社会進化の「法則」であることを、科学の名において宣言したのであった。そして、人間の社会生活や歴

史に関しても、神抜きに、諸事実相互の因果連関から客観的に説明する新しい歴史学や社会学が、科学的な学問としての市民権を獲得しつつあった。人間の内面の精神作用でさえも、生理学と実験心理学の登場によって、神が人間魂に授ける靈力など全く顧慮することなく、物質現象の一部として、実験室で客観的に研究できる対象とされるようになった。

このように進化論と諸科学の発展によって伝統的な宗教的教義が解体されていくことは、一面では人間理性の解放・自立を意味するとともに、他面ではキリスト教信仰に代わる新たな精神的拠り所を人間理性が神に依拠することなく自力で提供することができるのかという問題を引き起こす。デューイが「神を知ることの義務」を主張するのは、一見矛盾しているようではあるが、その問題に肯定的に答えるためであって、けっして科学を否定したり、人間理性を再び超越的な神の支配に従属させたりするためではないのである。科学の発展が懐疑論を招来し、人々の間に価値喪失状態を生み出したとすれば、それは科学そのものというより科学についての人々の理解の仕方が間違っているからだと言えよう。

「現代の見解〔懐疑論〕は、知識の起源と本性についての間違った理論から生じている。われわれは、知識を意志から分離している。われわれは、真理を義務から孤立させている。われわれは、あらゆる知られる事実はわれわれ自身について何かを要求するものだとすることを忘れてしている。われわれは、われわれの願望、興味、目的意識、要するにわれわれの道徳的本性の傾向全体がそれに関係する場合以外には、知識は生じないということを忘れてしている。」¹⁰⁾

これは一つの認識論批判に他ならない。そして、デューイは、懐疑論の克服、すなわちこれまで主として宗教が担ってきた道徳的な価値の世界の回復を、科学の否定によってではなく、科学の前進のうちに示された人間理性そのもの、その「正しい」理解のうちに見通すのである。

デューイによれば、認識とは単に知るか知らないかといった「無色の知的事柄」ではなくて、何かを知ろうとする「意志」の発現であり、それは「本質的に道徳的事柄」なのである。

「われわれの興味が事象に対して活気づいており、われわれの意志が能動的に、望まれている目的へと方向づけられている時以外、何ものについても知識は存在しない。われわれは、われわれが最も知りたいと思うものをのみを知るのである。知るか知らないかということは、人間の道徳的本性を少しも含まない無色の知的事柄ではない。それは本質的に道徳的事柄である。われわれは見出すために探さなければならず、われわれが探しているものを見つけるのである。」¹¹⁾

言い換えれば、認識は人間が世界と関わるときの、人間の世界に対する能動的な構えを現しているということであり、その意味で、認識は「無色の知的事柄」ではなくて、人間が世界に対してどのような態度で関わろうとするのか、その「道徳的本性」が鋭く問われる問題なのである。つまり、認識もそれ自体一つの道徳的な行為と考えられるべきだというわけである。

しかるに、デューイによれば、今日、多くの科学者は自然と歴史に関するきわめて微細な事実の研究に没頭し、そこでは知識の蓄積が何かそれ自体で目的であるかのように考えられ、事実の探究

と発見がもつべき本来的な道徳的意味については少しも顧みられていない。だが、そのような「純粹に知的な営み」は不健全で一面的であり、微細な事実の単なる積み上げは本当の意味での認識ではない、とデューイは言う。

「単なる諸事実は、それらが人間の本性全体、あるいは人間の社会的、道徳的な諸活動と関係づけられるようになるまでは、知識とはならない。」¹²⁾

本当の意味での認識とは、単なる事実の探究と発見に終始することではなく、そうしたことを越えて、何よりも人間の道徳的真理の把握、つまり人間の社会的、道徳的な諸活動を導く確固とした「真理」の把握に立ち向かい、そうした「真理」を把握しようとする人間の「意志」によって動機づけられ支えられた諸事実の探究と発見でなければならないのである。言い換えれば、事実についてのあるゆる認識は、その中に人間の道徳的真理の把握へと通ずる契機を必ず含んでいなければならないということであり、単なる事実の蒐集だけでは何の意味もないということである。

「自然と歴史の全世界は、人間の本性と諸活動に関係づけられないかぎり、無価値である。そして、科学と哲学は、人間の生きた活動および人間の全ての努力の最終目的へとあらゆる事実を究極的に関係づけるものでなければ、無価値である。」¹³⁾

そして、デューイは、そうした人間のあらゆる生きた活動を導く究極的な「真理」（道徳的真理）をここであらためて「神」と呼んでいる。だが、この「神」はもはや啓示宗教の超越的な人格神ではない。なぜなら、人間の活動を導く究極的な「真理」は、もはや超越的な神から啓示によって人間に与えられるものではなく、人間が自らの理性の力によって、人間と世界との関わりの中に、つまり自然と歴史の諸事実のうちに、人間が自ら発見するものだからである。神は、人間の現実世界のはるか彼岸にたつ超越的な至高の存在ではなく、人間と世界との関わりの中に内在する「真理」そのものである。それゆえ、彼が主張する「神を認識する義務」とは、そうした「真理」としての神を、まさにこの此岸の現実世界の中に発見する義務であり、科学を含む人間のあらゆる認識活動は、そうした義務の自覚的な遂行として、地上のあらゆる諸事実の中に「真理」としての「神」を見出すことでなければならないのである。

「全ての知識は一つである。それは、全て神についての知識であり、神というよりむしろ宇宙についての知識である。そして、もし一組の諸事実が神および神の被造物との全ての関係から切り離されて、それら自身であるものと見なされるならば、それは知識ではない。」「もし人間の願望と意志が神に向けられているならば、彼は彼の全ての知識の中に神を見つけるであろう。……神は常にわれわれの周囲にある。そして、神を知ることができないということは、われわれが神を知ろうと望んでいないということを示している。」¹⁴⁾

こうしてデューイは、神を此岸の現実世界の中に引き降ろし、神を人間理性の認識の対象としたのである。「神は常にわれわれの周囲にある。」これは、彼がかつてハイスクール教師時代に孤独な読書生活の中で体験したあの汎神論的な「宇宙との一体感」に通じる神概念であるだろう。だが、ここでは「宇宙との一体感」は、もはや単なる神秘的な感情体験ではなく、人間と世界との現実的

な関わりのうちに内在する「真理」として、「神」の存在を自然と歴史に関するあらゆる諸事実の中に発見することによって理性的に達成されるものとなっている。

2. 認識と宗教感情

以上のように、デューイは、神を人間の現実世界のうちに内在する「真理」と見なし、神を人間理性による認識の対象に据えたのである。言い換えれば、神は「真理」として、科学を含む人間のあらゆる認識活動がそこへと向かっていく究極の認識対象だということである。だが、そのような「真理」としての神の認識は、人々が単に表面的な諸事実や諸現象の認識に満足して、そこにとどまっているかぎり、成し遂げることができないものとデューイは言う。なぜなら、神＝「真理」の認識は、単なる事実認識や現象知ではなく、それらを越えて、まさに諸事実、諸現象の中に神＝「真理」を発見することだからである。もし神が彼岸にたつ絶対者だとすれば、人間は永遠に神に到達することはできず、それは単なる信仰の対象にとどまる。それは、一方における永遠の真理の世界と、他方における人間の現実世界との分割、前者による後者の支配という二世界論を生じさせる。だが、神は人間の現実世界に内在する「真理」であり、認識可能な対象である。そして、科学を含む人間のあらゆる認識活動は、地上の諸事実、諸現象の中に神＝「真理」を発見することを通して、分裂した二つの世界を媒介し、神を人間の手に取り戻し、最終的に人間が神と一体化する、そのための過程なのである。このように、デューイは人間の認識活動に道徳的な意味を含ませる。だから、科学を含む人間の認識活動を単なる事実認識や現象知に限定しようとするあらゆる試みは、神を人間の認識の対象から除外することによって、再び神を人間の現実世界から隔絶し、人間と神との一体化、人間自身による「真理」の把握を不可能にしてしまうとデューイは見なす。そこに、先に見た彼の認識論批判の意味がある。つまり、科学の発展が懐疑論を生み出しているとするれば、それは「知識の起源と本性についての間違っただ理論から生じている」ということになるのである。

デューイは、先に考察した学生キリスト者協会での講義「神を知ることの義務」の翌年(1885年)に、スコットランド人の巡回説教師ジョージ・マクドナルド(Jeorge Macdonald)の著作からの抜粋を編集して出版しているが、¹⁵⁾ その中の一節には、次のような記述がある。

「これは科学的と自ら称する全ての議論と直喩および教義との私の闘いである。それらは、まさに魂が貧弱なので、腕をどんなに広げても、神そのものを捉えられないでいる。そして、それらは神の周囲にモヤと嵐を生じさせ、その結果、父なる神が腕を天空と同じくらい広く広げて地上の疲れ果てた子供を抱こうとしているにもかかわらず、哀れな子供は父そのものを見ることができない。」¹⁶⁾

マクドナルドの文章は黙示録的であるけれど、そこには、神と人間との一体化を求めるこの時代のデューイのキリスト教理解と、皮相な科学的議論(と彼が受けとめたもの)に対する彼の批判的態度とが、映し出されている。

